# はじめに

各講で、「取り上げた題材の大学」の入試傾向を説明していますので、参考にしてください。本講座で各大学の出題傾向をしっかり掴み、合格を手に入れるように一緒に頑張りましょう！（講義を見終えたら、もちろん、自分が一番行きたい大学・学部の過去問を重点的にやるべきですが、万一それが終われば、まずは同じ大学の他学部の過去問を、そして、さらにそれが終われば、数多くいろいろな大学の過去問をやること）。

＊本講座は「文法」・「読解のルール」が理解できていることを前提に講義をしています。

## 予復習・授業の受け方について

各講の動画を見る前に、必ず該当講の予習をすること。予習が終われば、時間をあけずに該当講の動画を見てください。どうしてその解答を選んだのか、根拠を覚えている間に見ることが重要です。講義を見終えたら、復習を必ずすること。間違えた問題があった場合は、「なぜ」間違えたのか、その原因になるところをきちんと潰して、次回同じような問題が出たときには解けるようにしていきましょう。「復習問題」がありますが、授業で扱っていない問題がたくさんあるはずです。授業で扱っていないものは、その講で取り上げた題材の大学の他学部の過去問です。「復習問題」というよりは「チャレンジ問題」という位置づけで解いてください。もちろん解説があるので、実施後にきちんと読むこと。あとは、解答解説に重要単語も載せていますので、そこに掲載されている単語（特に太字）は完璧にしてくださいネ。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

# 目　次

第一講　『しぐれ』　関西大学……p. 3
第二講　『松陰中納言』　同志社大学……p. 17
第三講　『落窪物語』　関西学院大学……p. 25
第四講　『袋草紙』　関西大学……p. 38
第五講　『古今著聞集』／『明恵上人日記』　同志社大学……p. 53
第六講　『松帆浦物語』　関西学院大学……p. 66



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

# 第一講『しぐれ』　関西大学

　左大臣には兄妹の二人の子どもがあった。入内(じゅだい)させようと大切にしていた妹の姫君（問題文中では「女御(にょうご)」）が風邪(かぜ)で清水寺に参詣するのだが、心配な父、左大臣は、兄の中将（物語の主人公。同じく「御兄、中将殿」「中将殿」）を遣いに参らせる。中将はそこで、急な時雨(しぐれ)に雨宿りする姫君（女主人公。同じく「姫君」）に出会う。本文はその出会いの場面であるが、読んで、後の問いに答えよ。

　さて二三日にもなりければ、おぼつかなしとて、御兄、中将殿を清水へ遣り参らせたまひけり。*1紅葉落葉(こうえふらくえふ)の狩衣(かりぎぬ)に御仮粧ありて、やがて*2先がけ、侍(さぶらひ)、御随身(みずいじん)召し具して清水の西門(さいもん)へ入らせたまへば、参り下向の輩(ともがら)、目を驚かして見たてまつるに、*3女御の御心のおぼつかなくいかがとおぼしければ、「侍ども、とくとく」とて、面面急ぎ召し具して堂(だう)の辺(へん)をざざめきて上りたまふ。折節、にわかに空曇り風吹きて、はしたなき時雨する。参り下向の数多きなかに、年のほど十五六ばかりなる姫君のなのめならずうつくしき、女房達四五人してぬらさじと立ち隠す。中将殿、これを御覧じて、わがささせたまひたる御傘、*4六位の進(しん)にておくらるる。姫君、こはいかにとおぼしめして見上げたまひつる御目のうちのけたかさ、あくまで愛敬(あいぎやう)がましくてうつくしくぞおはしける。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

　さて、姫君は本堂の東の縁（えん）に立たせたまひて、「今は御傘参らせよ」と仰せける。中将殿はぬれながら御傘待ち得させたまひて、「この人々はいづくにぞ」と問はせたまへば、「いまだあれに立たせたまひて候ふ」と申せば、やがて人を遣はせて見せられけれども、おはせざりけり。さて、女御の御心地、別の事に渡らせたまはねば、やがて御下向あるべけれども、傘さしておくりつる人の事、御心にかかりければ、「今宵はこれに通夜（つや）せん」とて仏の御前にあくがれ居たまひけり。尋ねん方も覚えず、せん方もなければ、ただつくづくと眺めのみせられて、局（つぼね）に入りたまひたれども、静心なかりけり。

　さる程に、隣の局に人の籠（こも）りてゆゆしく忍びたるよそほひなりければ、怪しくてここかしこより覗（のぞ）きたまへば、内には几帳（きちやう）を引かれたり。見るべきやうもなかりけるに、柱の節抜けの穴のありけるに紙を丸めて押し支（か）ひたり。引き抜きて見たまへば、傘さしておくりし人なり。見るに胸うち騒ぎて覗き入りて見たまへば、時雨にぬれたる装束を脱ぎ置きて干し散らし、姫君は綾羅（りようら）の紫の衾（ふすま）引きて寄り臥（ふ）したまへり。四十ばかりなる女房の清げなるが御側（そば）にさし寄りて、巻貝磨（す）りたる硯（すずり）の蓋（ふた）にいろいろの果物どもを調へて、「これこれ」と勧めけれども、姫君は御目をも懸けられず。ゆゆしげなる気色にて、いかに申せども答（いら）へたまはねば、この女、申すやう、「例の、また、むつかしや。御覧じ入れさせたまへかし。よろづ



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

御心苦しくこそ候へ。(A)あはれ御親に添ひ参らせたまひて候はば、今かかる端近き御歩(あり)きなどよもあらじ。この精進のついでに賀茂へも参らばやと思ふに、かやうにくたびれさせたまひてはいかがせん」とぞ申しける。また、若き女二人、さし寄りて申すやう、「生まれさせたまひてより後は、今日こそ始めてかち歩き。仏もいかばかりいとほしく御覧ずらむ」と、かやうに面面に申しけれども、姫君は寄り臥してくたびれたまへる御気色、なのめならずぞうつくしき。

さて、日も暮れなんとす。「参りを始めばや」とて、十二三ばかりなる*5上童(うへわらは)を一人御伽(おとぎ)に置きて、女房四五人うち連れて拝礼しにぞ出でにけり。その時中将殿、よき暇かなと嬉(うれ)しくおぼしめして、紅葉襲(もみぢがさね)の薄様(うすやう)の、殊(こと)に匂(にほ)ひ深きに文を書きて遣(や)りたまふ。詞(ことば)なくして、

　たまぼこの道行(みちゆき)ぶりに見るよりも契りは深き物と知らずや

と、かやうに書きて随身を召して、「これ、並びの局へ参らせよ」とて賜(た)びにけり。さてまた中将殿は覗きたまふに、随身遣戸(やりど)をほとほとと叩(たた)けば、「誰(たれ)やらん」とて出でたるに、「時雨の雨の時、御傘参らせたまへる人の文にて候。参らせたまへ」と申せば、上童取りて内へ入り、「御傘の主(ぬし)の文(ふみ)なり」とて参らせけり。姫君起きたまひて、「その文持て」とて持たせて、



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

中をば開けずしてつくづくと御覧じて、「人違へにてぞあるらむ。思ひも寄らぬ事なり」とて、御手をも触れず、「物の主に取らせよ」とて返されたまひ、随身「情けなし」と申せば、「さらば文を取りたらんところへ捨てよ」と仰せられければ、立ち出でて、雨落ちにうち捨つる。その上は力なくして取りて帰りぬ。中将殿、いかがせんとぞおぼしける。

（『しぐれ』より）

注
＊1　紅葉落葉の狩衣＝紅葉や落葉の模様を織りだした狩衣。狩衣は貴族の平服。
＊2　先がけ、侍、御随身＝それぞれ、行列を騎馬で先導する者、貴人の身辺を世話する者、貴人の外出の際に警護する者。
＊3　女御＝天皇の后の名称のひとつ。ここでは入内前の、中将の妹の姫君のこと。
＊4　六位の進＝中将の侍の呼び名。
＊5　上童＝ここでは姫君に仕える少女。

**問一**　左大臣に遣わされて清水寺に向かう中将殿のようすはどのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　清水寺に遣わされた中将殿は、身支度や供の者の準備に手間取り、しばらくしてから仰々しい行列で出かけ、往来を行き交う人々が右往左往するような事態となった。

b　清水寺に遣わされた中将殿は、行列を整えてあわただしく出かけたところ、何事が起ったのかと、かえって妹の姫君一行を不安がらせるという事態となった。

c　清水寺に遣わされた中将殿は、顔や身なりをうつくしくととのえて、供の者を大勢従えた仰々しい行列を仕立てたため、参詣する人々は驚いて目を見張ってしまうという事態となった。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

d　清水寺に遣わされた中将殿は、少人数だがいかめしい行列を整えて出かけたので、清水寺に参詣していた人々はその行列のものものしさに驚いて、早々に帰ってしまうという事態となった。

e　清水寺に遣わされた中将殿は、一人で目立たない身なりにやつし、供の者も従えず、ひそかに寺を訪れたので、事情を知らない人々は、最初はだれが来たのかわからないという事態となった。

**問二**　急に時雨が降ってきたとき、中将殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿の供の侍がこのようすを告げたので、その者がさしていた傘を姫君に貸してさしあげるよう命じたところ、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

b　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、自分がさしていた傘を直接貸してあげようとなさったとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

c　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、供の者がさしていた傘を、姫君に仕えている別の女房を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

d　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、自分がさしていた傘を、供の侍を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

e　多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿が、自分がさしていた傘を、中将を案内していた寺僧を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

**問三**　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、事態はどうなったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、傘を貸した姫君のことが気がかりだったので、寺で一夜を明かすことになった。

b　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに供の者に見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかった。一方、姫君のほうもだれが傘を貸してくれたのかわからなかったので、その正体が知りたくて寺で一夜を明かすことになった。

c　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはいったいどこに行ったのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、妹の姫君のようすが気になって、寺で一夜を明かすことになった。

d　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸しに行った者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに使いの者をやったところ、すでにその場所からどこかへ行ってしまったようで、その者たちを探すうちに夜になってしまい、中将殿はやむをえず寺で一夜を明かすことになった。

e　姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどうしているか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、姫君の兄君から派遣された使者だということを口実にして、寺で一夜を明かすことになった。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

**問四**　姫君の一行が清水寺に参籠（ろう）しているとき、中将殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　中将殿は、隣の局に誰か参籠している気配がするので気になって覗こうとしたが、局の内側には目隠しの布がところどころに引きめぐらしてあり、すこし見通しが悪かったので、柱の節の穴に貼られた紙の札をはがして、そこから中のようすをうかがった。

b　中将殿は、隣の局に参籠している人に、寺僧が参籠の規則を告げているのが聞こえてきたので、気になって覗こうとしたが、局の周囲が目隠しの布で覆われていて見るすべもなかったので、柱の節の穴をふさいでいる紙を引きぬいて、そこから中のようすをうかがった。

c　中将殿は、隣の局に上品な女性が参籠している気配なので、気になって覗こうとしたが、局の内部は間仕切りの布が垂れ下げてあり、まったく見通しがきかなかったので、紙でふさがれている柱の節の穴を見つけ、その紙をはがして、そこから中のようすをうかがった。

d　中将殿は、隣の局にいる人が他の参詣の人々を避けているような気配なので、気になって覗こうとしたが、局には目隠しの布が引きめぐらしてあり、見られることをひどくいやがっているようなので、柱の節にむりやり穴をこじあけて、そこから局のようすをうかがった。

e　中将殿は、隣の局に誰か人目を避けて参籠している気配がするので、気になって覗こうとしたが、局には部屋を仕切る布が目隠しのようにめぐらしてあり、見るすべもなかったので、柱の節の穴をふさいでいる紙を引きぬいて、そこから局のようすをうかがった。

**問五**　参籠する姫君のようすに対して、女房たちはどういったか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしゃったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすでなにもおっしゃらないので、女



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

房は、「またいつものわがままがはじまった、もう何も申し上げません」といった。

b　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしゃったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすでなにもおっしゃらないので、女房は、「またいつもの気ふさぎがはじまった、せめて私たちの苦労をご理解くださってもよいのに」といった。

c　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしゃったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすで、女房がどのように申し上げても返事すらなさらないので、女房は、「またいつものように面倒なことになった、召し上がってくださいませ」といった。

d　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしゃったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすなので、女房はうとましく思い、「またいつもの不機嫌がはじまった、たまには私たちに気をつかって召し上がってくだされればよいのに」といった。

e　姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、気分が悪いといって夜具に寄りかかっておられたので、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず、返事するのもけだるそうになさるので、女房は、「雨にぬれたせいで、また風邪がぶり返しなされたのでしょう」といった。

**問六**　夕暮れどきに、姫君一行のようすを見て、中将殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、幼いために参拝できない少女だけをのこして、姫君と女房たちは連れだって礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、上品な香りをたきこめた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

b　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女一人を姫君の話し相手にのこして、女房たちは連れだって礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、紅葉の色を重ね合わせた、とりわけ美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

c　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女一人を案内に先立てて、女房たちは連れだって礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、香り高い美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

d　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、姫君は、お仕えの少女一人を局の留守番にのこして、女房たちを伴って礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、紅葉のように色とりどりの紙を貼りまぜた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

e　日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女数人を姫君の世話係にのこして、女房たちは連れだって礼拝に出て行ったのと入れ違いに、先に参拝をすませた中将殿は、紅葉をかたどった金箔を貼り付けた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

**問七**　中将殿は、「たまぼこの」という和歌にどのような恋心を託したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　手紙に歌だけを書きつけて送って、寺に来る道すがらお姿をお見かけして、たちまちあなたの美しさにとりこになって、ふたりの縁を思わずにはおれませんでした、という恋心をうたった。

b　いきなり歌を送ってこられて、ことばをなくしてしまったのですが、寺に来る道の途中ですれ違ったお方があなただとわかって、あなたとの縁がこれほど深いものとは思いもかけないことでした、という恋心をうたった。

c　なんの前書きもつけずに歌だけを書きつけて送って、寺に来る道すがら遠目にお見かけしたときよりも、こうしておそばでお見受けするといっそう美しく見え、あなたとの縁がこんなにも急に進展するとは思いもかけないことでした、という恋心をうたった。

d　なんの前書きもつけずに歌だけを書きつけて送って、寺にお参りする道すがらお見かけしてからというもの、あなたとの縁が前世からの深いものだったのだとはお思いになりませんか、という恋心をうたった。

e　直接お話することがかなわないので、歌を送ることしかできないのですが、あなたは多くの参詣者のなかで、だれよりも美しいので、たちまち心ひかれることになってしまいました、という恋心をうたった。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

**問八**　和歌を送られた姫君は、そのあとどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君はものも言わずそれを見ていたが、「きっと人違いです、無礼は許しません」と言って、手紙に触れようともせず、使いの者に返そうとしたが、使いの者が「それでは私が困ります」と言って受け取ろうとしないので、使いの者に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下を流れる雨水にうち捨てさせた。

b　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君はその手紙を取り次いだ上童にそれを持たせたまま手紙を開けもせずじっと見ていたが、「きっと人違いです、思い当るところがありません」と言って、手紙に触れようともせず、使いの者に返すように上童に指示したが、使いの者が「つれないことです」と言って受け取ろうとしないので、上童に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

c　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は使いの者に持たせたまましばらくじっと見ていたが、「きっと人違いです、思いもよらぬ失礼なことです」と言って、手紙に触れようともせず、使いの者に持ち帰るように指示したが、使いの者は無礼にも姫君の指示に従わないので、姫君はそばにいた女房に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

d　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は、取り次いだ上童に持たせたまましばらくじっと見ていたが、「きっと人違いです、思い当るところがありません」と言って、手紙に触れようともせず、女房に返すように指示したが、あきれたことに使いの者が持ち帰ることを拒んだので、姫君は「それなら捨ててしまいなさい」と女房に命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

e　使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は手紙を開けもせずしばらくじっと見ていたが、「きっと人違いです、思い当るところがありません」と言って、手紙に触れようともせず、手紙の主に返すように使いの者に指示したが、使いの者が「そんな無愛想な」と言って受け取ろうとしないので、上童に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下にたまった雨水にうち捨てさせた。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

**問九**　波線部（A）を現代語訳せよ。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

# 第一講　復習問題

① 次の文章を読んで後の問に答えよ。

〈中略〉簾(すだれ)巻き上げて、三十(みそぢ)に今ぞ及ぶらむとおぼゆるほどなる人、高欄(かうらん)のもとにて和琴(わごん)を弾くあり。頭(かしら)つき、様体(やうだい)ほそやかに、しなしなしく、きよらなるに、髪のいとつややかにゆるゆるとかかりて、めやすき人かな、と見ゆるに、向かひざまにて、紅(くれなゐ)か二藍(ふたあゐ)かのほどなめり、いと白く透きたる好ましげなる人、すべり下りて、長押(なげし)に押しかかりて、外ざまをながめ出でて、琵琶(びは)にいたく傾(かたぶ)きかかりて、かき鳴らしたる音(ね)、聞くよりも、うちもてなしたる有様、かたち、いと気色ばみ、なつかしくなまめき、こぼれかかれる額髪(ひたひがみ)の絶え間のいと白くをかしげなるほどなど、まことしく優なるものかな、と見ゆるに、…（以下略）。

**問1**　中納言が垣間見た和琴を弾く人とはどのような人であったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、なよなよとして清潔そうで、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

b　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、気品があって美しい上に、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。
c　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、お上品ぶって近づきにくく、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、いささか感じの悪い人であった。
d　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、品がなく澄まし顔で、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、いささか感じの悪い人であった。
e　三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、なまめかしく派手で、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。

**問2**　中納言が垣間見た琵琶を弾く人とはどのような人であったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにもなつかしくあでやかな人であった。
b　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも幼さの中にも大人っぽさを秘めた人であった。
c　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも人なれして若わかしさにあふれた人であった。
d　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも親しみ深く物静かで優雅な人であった。
e　たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも近づきやすく庶民的な人であった。


© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

②　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

（中納言）「この竹の中に隠れて」といひて、帰り入りて見たまへば、…〈中略〉…いと静やかなるに、（中納言）「ゆくりなくあはつけき振舞は、おのづから軽がろしきことも出でくるを」と、ありがたくおぼしをさめたる心なれど、我ながらあやしく鎮めがたきを、…（以下略）。

**問**　竹の中に身を隠していた中納言の心中はどのようなものであったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　計画通りの慎重な行動をするつもりでも、時には軽がるしいことも起こってくるから、と万事に思慮深い中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

b　だれが見ても自己中心的な行動は、時にまわりの人たちに迷惑をかけることも起こってくるから、と何ごとにつけ遠慮深い中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

c　突然の軽はずみな行動は、自然と身分にふさわしくないことも起こってくるから、と普通には見られないほどの自制心を持った中納言であったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

d　時にはすばやい振る舞いをしなければせっかくの機会をのがしてしまう、といつもはのんびりとした行動をする中納言であったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

e　好奇心にかられた発作的な行動は、時には不都合なことも起こってくるから、といつもは小心で大胆な行動のできない中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

# テキスト解答・解説

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第一講】

〔模範解答〕

問一　c　　問二　d　　問三　a　　問四　e

問五　c　　問六　b　　問七　d　　問八　b

問九　ああ、姫君がご両親にご同伴申し上げなさいますならば、今このような端近くで人目にふれるように外出なさることなどまさかないでしょうに。

〔現代語訳〕

そして、二三日にもなったので、（左大臣は姫君のご病状が）心配だというので、（姫君の）兄君である、中将殿を清水寺に遣いに参らせなさった。（中将殿は）紅葉や落葉の模様を織り出した狩衣を着て顔や身なりを整えて、すぐに行列の先導者、侍、御随身（などの従者）を召し連れて清水寺の西門にお入りになると、参詣する人も下向する人も、驚いて目を見張って拝見するが、（中将殿は）妹君のご病状が気がかりで「どうであろうか」とお思いだったので、「侍たちよ、早く早く」と言って、皆の者を急ぎ召し連れてお堂のあたりを騒がしい音を立ててお上りになる。ちょうどその時、急に空が曇り風が吹いて、激しく時雨が降ってきた。参詣する人や下向する人が大勢いる中に、年は十五、六歳ぐらいの姫君できわだって美しい姫君を、女房たちが四、五人で濡らすまいと立って（囲んで）隠している。中将殿は、これをご覧になって、自分が差していらっしゃった傘を、六位の進を通じてお貸しになる。姫君は、「これはどうしたこと」とお思いになって見上げなさったお目の中の気高さは、どこまでもかわいらしく美しくいらっしゃった。

さて、姫君は本堂の東の縁側にお立ちになって、「もう傘をお返ししなさい」とおっしゃった。中将殿は濡れながら待って傘を受け取りなさって、「この（傘をお貸しした）者たちはどこにいるのか」とお尋ねになると、「まだあちらに立っていらっしゃいます」と申し上げるので、すぐに使者を見にやらせなさるけれど、（姫君は）いらっしゃらなかった。さて、妹君のご病状は、



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

たいしたこともおありではなかったので、すぐにでもお帰りになるべきところだが、傘をお貸しした姫君のことが、気がかりでいらっしゃったので、「今夜はここでお籠りをして一晩中お祈りをしよう」と言って仏様の前に上の空でお座りになった。（姫君の居場所を）尋ねようもなく、どうしようもないので、ただしんみりと物思いにふけなさって、部屋にお入りになったけれど、心は落ち着かなかった。

そうしているうちに、隣の部屋に誰かがお籠りをしてひどく人目をはばかっている様子だったので、妙に思ってあちこちから覗きなさると、部屋の中には几帳が引かれている。見るすべもなかったが、柱の節の抜けた穴があったところに紙を丸めて押し込んであった。（その紙を）引き抜いてご覧になると、（そこにいたのは、）あの傘を貸した姫君である。見ると胸がどきどきして覗き込んでご覧になると、時雨で濡れた衣装を脱ぎ置いて干して散らかし、姫君は綾羅の紫の夜具を引いて寄りかかって伏せっていらっしゃる。四十歳ぐらいの女房でこざっぱりした人がお側に寄って、巻貝をすりだした硯箱のふたに様々な果物や菓子などを整えて盛って、「これをどうぞ」と勧めたけれど、姫君は目をお留めにもならない。たいそう嫌そうなご様子で、（女房が）なんと申し上げても（姫君は）ご返事なさらないので、この女房が、申し上げるには、「いつものように、また、面倒なことよ。召し上がってくださいませ。なにかにつけお気の毒でございます。ああ、姫君がご両親にご同伴申し上げなさいますならば、今このような端近くで人目にふれるように外出なさることなどまさかないでしょうに。この清水寺参籠のついでに賀茂神社にもお参りしたいと思うのに、このようにぐったりなさってはどうしようか」と申し上げた。また、若い女房二人が、近寄って申し上げるには、「お生まれになって以来、今日が初めての徒歩での外出。仏もどれほど気の毒に思ってくださっているでしょう」と、このようにそれぞれに申し上げたけれど、姫君は寄りかかって伏せってぐったりなさったご様子で、（そのご様子すら）格別に美しい。

さて、日も暮れようとしている。「参拝を始めたいわ」と言って、一二、三歳ぐらいのお仕えの少女を一人話し相手に残して、女房四、五人が連れ立って拝礼しに出て行った。その時に中将殿は、「ちょうどよい機会だなあ」とうれしくお思いになって、紅葉重ねの薄手の紙で、とりわけ美しい紙に手紙を書いてやりなさる。前書きの詞はなくて、

たまぼこの…＝あなたと寺にお参りする道の途中ですれ違い、お見かけしてからというもの、二人の縁が前世からの深いものだとはお思いになりませんか。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

と、このように書いて随身をお呼びになって、「これを、隣の部屋に差し上げよ」と言ってお与えになった。そしてまた中将殿は覗きなさったところ、随身が遣戸をとんとんと叩くと、「どなたでしょうか」と言って出て来たので、「時雨の雨の時、お傘を差し出しなさった人からのお手紙でございます。姫君に差し上げてください」と申し上げると、お仕えの少女が受け取って中に入り、「お傘の持ち主からのお手紙です」と言って差し上げた。姫君は起き上がりなさって、「その手紙を持て」と言って持たせて、中を開けないでじっとご覧になって、「人違いでしょう。思い当たることがありません」と言って、お手も触れず、「その手紙の主に渡しなさい」と言って返しなさり、随身が「つれないことです」と申し上げると、「それならば手紙を受け取ったところに捨てよ」とおっしゃったので、（少女は）出ていって、（軒下の）雨の落ちる所に捨てる。そうなったからにはどうしようもなくて（随身は）受け取って帰った。中将殿は、どうしようかとお思いになった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

**〈重要単語〉**　※「敬語」の「重要単語」は、文法講座で既出のため、省いています（第二講以降も同様）。

○おぼつかなし…①**はっきりしない。**　②**気がかりだ。**　③**待ち遠しい。**
○やがて…①**そのまま。**　②**すぐに。**
○ぐす【具す】…①備わる。　②**一緒に行く。**
○なのめならず【斜めならず】…並一通りではない。**格別である。**
○あいぎゃう【愛敬】…①温和でやさしく魅力的なこと。　②顔かたちがやさしくかわいらしいこと。
○あくがる【憧る】…①魂が身から離れる。うわの空になる。　②思いこがれる。　③**さまよい歩く。**
○ながむ【眺む】…①**物思いにふける。**　②じっと遠くを見る。
　【詠む】…**詩歌を吟じる。**
○ゆゆし…①おそれ多く慎まれる。　②**不吉だ。**　③**すばらしい。**
○あやし【怪し・奇し・異し】…**不思議だ。**
　【賤し】…**粗末だ。身分が低い。**
○こころぐるし【心苦し】…①**つらい。**　②心配である。　③**気の毒だ。**
○かち【徒歩】…**徒歩。**
○いとほし…①**気の毒だ。**　②いやだ。　③かわいい。
○ちぎり【契り】…①**前世からの約束。**　②**因縁。男女・夫婦の縁。**
○なさけなし【情け無し】…①**思いやりがない。**　②**無風流だ。**　③嘆かわしい。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

# 復習問題解答

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

# 復習問題　第一講　解答解説

〔解説〕

① 問1　本文「三十に今ぞ及ぶらむとおぼゆるほどなる人、高欄のもとにて和琴を弾くあり。頭つき、様体ほそやかに、**しなしなしく、きよらなるに、髪のいとつややかにゆるゆるとかかりて、めやすき人かな、**と見ゆる」部分が、設問該当箇所。選択肢を横に見ると「三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、」は共通。その後ろの部分と該当本文箇所（太字部分）を対応させる。まず、本文で「めやすき人かな」と褒めているので（「めやすし【目安し】」は重要単語で、「見苦しくない・感じがよい」の意味）、「感じの悪い」となっているc、dは削る。「しなしなし」が重要単語ではないが、この前後でずっと褒めているのに、ここだけけなしているとは考えにくいことから、プラスの意味の単語であろうとは予測がつくはず。よって、「なよなよとして」や「派手」という表現が入っているa、eも削る。全体に褒めているbが正解。

問2　本文「紅か二藍かのほどなめり、いと白く透きたる好ましげなる人、すべり下りて、長押に押しかかりて、外ざまをながめ出でて、琵琶にいたく傾きかかりて、かき鳴らしたる音、聞くよりも、うちもてなしたる有様、かたち、いと気色ばみ、**なつかしくなまめき**、こぼれかかれる額髪の絶え間のいと白くをかしげなるほどなど、まことしく優なるものかな、と見ゆる」部分が、設問該当箇所。選択肢を横に見ると「たいそう色白で透き通るような美人で、かき鳴らした琵琶の音色を聞くとすぐに身のこなしや容姿が際立ち、いかにも」は共通。本文の太字部分の「なつかし」と「なまめく」の単語の意味で解ける。どちらも重要単語。「なつかし」は「心がひかれる・親しみやすい」。「なまめく」は「優美だ・上品だ」の意味。よって、どちらの解釈もきちんとできているdが正解。



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

②　本文「（中納言）『**ゆくりなくあはつけき振舞は、おのづから軽がろしきことも出でくるを**』と、**ありがたくおぼしをさめたる心なれど、**我ながらあやしく鎮めがたきを…」部分が、設問該当箇所。選択肢を横に見ると、後半部分「…中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。」が共通。よって、太字部分が重要であるが、実はこの設問も「ゆくりなし」と「ありがたし」の単語の意味で解ける。どちらも重要単語で、「ゆくりなし」が「思いがけない・突然だ」、「ありがたし」が「めったにない・（めったにないほど）すぐれている・生きながらえにくい」の意味。「突然の」と「普通には見られない」と、どちらの意味もきちんと解釈しているｃが正解。

〔**解答**〕

①　１　ｂ　　２　ｄ

②　ｃ



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。